

自然教育園におけるオオタカの食餌物

武 藤 幹 生^{*} ・ 藤 村 仁^{*}

The Foods of Goshawks in the Institute for Nature Study

Mikio Mutoh^{*} and Hitoshi Fujimura^{*}

は じ め に

オオタカ *Accipiter gentilis* は北半球に広く分布する、タカ目タカ科ハイタカ属の鳥である。日本でのその生息数は少ないと言われ、環境庁より絶滅危惧Ⅱ類 (VU: 絶滅の危険が増大している種) に指定されている。体長は雌がカラス大、雄がそれよりやや小型で、鳥類・哺乳類を主とした肉食である。豊かな生物相の象徴とされることも多い。

東京都内では1980年代から観察例が増え、ハト類を多く捕食しているという (川内1997)。自然教育園では古くよりオオタカの観察記録があるが (千羽・坂本1978、1981、1985、1989、1992)、まれに見られる程度であった。しかし1998年より冬季のみであるが定着し、自然教育園内で獲物を捕食をする行動が見られたので、それより2000年までの3年間の記録を報告する。

1. 自然教育園内でのオオタカの行動

オオタカは季節によって渡りをする個体が多いが、自然教育園内で観察されたのは主に秋から冬で、園内での繁殖はしておらず、越冬にのみ訪れていることが分かる。秋の渡りの時期などには成鳥・幼鳥・雄・雌、共に見られるが、冬に入ってから雌の幼鳥が多く観察されている。

園内では早朝全域で見られ、入園者が園路を歩行する時間帯には主にサンショウウオの沢から声が聞こえることが多い。サンショウウオの沢には入園者は立ち入らず、職員も入ることが稀なため、人の少ない場所に移動しているものと思われる。園内での採餌は主に早朝行われているようで、直接捕食しているのを確認できた例は多くなく、主として羽毛や死体が食痕として観察される。

2. 食痕の判定

自然教育園内では鳥類の捕食者として、オオタカ以外にノネコとハシブトガラスが考えられる。オオタカは獲物を捕獲する時に頸部を切り落とすことが多く、その後体羽を執拗にむしり、皮膚がある程度露出した状態で腹部もしくは総排泄口から食べる。ノネコは鳥類や哺乳類を捕獲し食べる時に体羽や体

^{*} 国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum

毛をむしることが少なく、骨もかみ砕く。また自然死の個体は羽毛の散乱が見られないことなどから、オオタカの食痕の判定として、以下の項目を基準とした。

- ①園内でオオタカが観察されている
- ②羽毛が散乱している
- ③頭部がない・もしくは頸部に損傷がある
- ④主に腹部から胸部が採食されている
- ⑤骨の損傷が少ない、など

なお、ハシブトガラスについては比較的オオタカに似た採食行動を取るが、園内でハシブトガラスがほかの鳥類を捕食した観察記録はないため、以上の特徴を持つものはオオタカによる食痕とした。また、記録には捕獲を試み、失敗した観察例も2例あったため、捕食対象になったものとして今回の報告数に含めることにした。

3. オオタカの食餌物の記録

1998年から2000年までのオオタカの食餌物及び初認・終認の記録を表1に示す。

種名はオオタカに捕食及び攻撃された種である。なお、備考には目撃者は筆者以外である場合はその氏名を、食痕確認の同日に園内でオオタカが観察されていればその記録を示した。

表1 自然教育園におけるオオタカの食餌物（1998～2000年）

観察日	種名	確認方法	オオタカの 雌雄幼成	場所	備考
1998/11/14	初認				
1998/11/14	ハシブトガラス	目視	♀Y	カラストラップ	
1998/12/05	キジバト	目視	♀Y	イモリ池	
1998/12/26	コサギ	目視		水鳥の沼	失敗
1999/01/27	オシドリ	食痕		水生	藤村
1999/04/30	ハシブトガラス	目視	♀Y	東屋	
1999/04/30	終認				
1999/07/25	ヒヨドリ	目視	♂Y	水生	失敗・大澤
1999/10/28	初認			サンショウウオ沢	声・大澤
1999/11/06	シメ	食痕		路傍	藤村
1999/11/18	ハシブトガラス	食痕		森の小道	
1999/12/07	ドバト	食痕		三叉路	
1999/12/08	キジバト	食痕		路傍	♀観察
1999/12/15	ドバト	目視		森の小道	
1999/12/24	ドバト	食痕		森の小道	
1999/12/24	オナガ	目視	♂	イモリ池	桑原
1999/12/26	キジバト	食痕		森の小道	
1999/12/26	ハシブトガラス	食痕		T字路	
2000/01/04	ドバト	食痕		路傍	♀Y観察
2000/01/04	ドバト	食痕		水生	♀Y観察・少し古い
2000/01/06	キジバト	食痕		カワセミ池	♀Y観察
2000/01/11	ハシブトガラス	食痕			桑原・♀Y観察
2000/01/22	キジバト	食痕		武蔵野	吉野
2000/02/26	トラツグミ	食痕		カワセミ池	♂観察（藤村）
2000/03/20	ハシブトガラス	食痕		水生	
2000/04/12	ハシブトガラス	食痕		ひょうたん池	大澤
2000/04/19	終認			カワセミ池	矢野
2000/10/07	初認			水生	♀Y・藤村
2000/11/23	ドバト	食痕		館跡	
2000/12/14	オシドリ	食痕		東屋	奥津

特記事項を挙げると、1998年11月14日はカラスの標識調査用の捕獲トラップにオオタカが入り、おとりとなっているハシブトガラスを捕食していた（その後放鳥）。1998年12月26日のコサギは、オオタカに攻撃を受けてはいたものの、同時にハシブトガラスによって行われていたオオタカへの擬攻撃によって妨害され、失敗に至った。1999年7月25日の個体は継続的な記録がないが、7月27日に園内で死亡しているのが発見された。確認したところ虹彩が灰色など極めて若い特徴を持つ雄個体で、巣立ち後間もないとみられた。この時期巣立

った雛が移動を始めるが、本個体はそれにあたると思われた。

2000年1月4日は、年末年始の閉園期間（12月28日～1月4日）明けで、その間に捕食されたものと思われる。

合計すると25例中、ハシブトガラス8例、キジバト5例、ドバト5例、オシドリ2例、コサギ・シメ・オナガ・トラツグミが1例ずつとなった（図1）。

ハシブトガラスは自然教育園でねぐらを作り、極めて個体数が多い種である。日中は数百羽が園内で

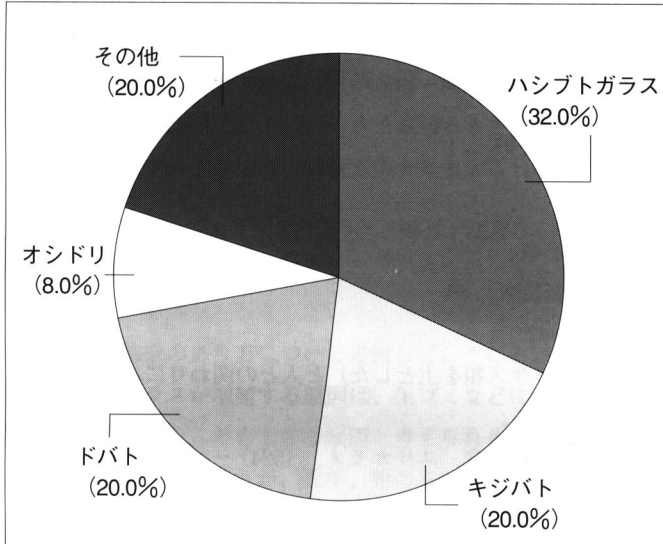


図1 自然教育園内におけるオオタカの食餌物（1998～2000年）

水浴びなどを行っている。主に樹上で生活しているが、地上、水辺など、園内全域に見られる。キジバトは冬季に特に多く、10羽前後の群れで地上で採餌をしている。一方ドバトは園内では比較的観察数は少なく、管理棟付近や水生植物園付近の地上に稀に飛来するのみである。キジバトとドバトをまとめると10例となり、ハト類の被食率が最も高い。オシドリも通年見られるが、冬季に特に多く、ひょうたん池や水鳥の沼などで群れている。

ま と め

今回合計25例という少ない事例であったが、自然教育園でのオオタカがカラス類とハト類に大きく依存していることが明らかになった。栃木県のカラス類のねぐらになっている緑地（遠藤・野中・内田1998）や大阪の都市公園（和田1996）でも同様の状況が見られるという。また、遠藤らによるとカラス類のねぐらを狩り場としていないオオタカの、1～2月の95%行動圏は5個体で788～2683ha（平均1092.8ha）であるが、カラス類のねぐらを狩り場としている個体の行動圏は著しく小さいという（95%行動圏206ha）。明治神宮など、その他の都市公園などでも冬季のオオタカの観察例が多くあるが（日本野鳥の会東京支部1999～2000）、以上のことより餌要因さえ解決できれば連続していないある程度小さな緑地でも十分生息できることが分かる。

なお、自然教育園内で雌の観察例が多いことに関しては、ハシブトガラスの個体数が多い自然教育園において、カラス類より体の小さなオオタカの雄は、うまくそれらを捕獲することができないからではないかと推測される。幼鳥が多い理由は定かではないが、捕獲技術の未熟さからカラス類やハト類の多い場所に依存している可能性は高い。

最後に、本報告を書くにあたって園内での貴重な情報を寄せて下さった矢野亮、奥津励、大澤陽一郎、

桑原香弥美、吉野由美子の諸氏には深く感謝する。

参 考 文 献

- 千羽晋示. 1978. 自然教育園の鳥類について. 自然教育園報告, (8):75-106.
- 千羽晋示. 1981. 自然教育園の鳥類について 新に記録された鳥類などの追加. 自然教育園報告, (12):121-123.
- 千羽晋示・坂本直樹. 1985. 自然教育園の鳥類の記録 (1982～1984年). 自然教育園報告, (16):75-82.
- 千羽晋示・坂本直樹. 1989. 自然教育園の鳥類の記録 (1985～1988年). 自然教育園報告, (20):15-19.
- 千羽晋示・坂本直樹. 1992. 自然教育園の鳥類の記録 (1988～1991年). 自然教育園報告, (23):1-9.
- 川内博. 1997. オオタカが増えたわけは? 「大都会を生きる野鳥たち」, 52-62. 地人書館.
- 遠藤孝一・野中純・内田裕之. 1998. 非繁殖期におけるオオタカの行動圏. 1998年度日本鳥学会大会講演要旨集: 78.
- 和田岳. 1996. オオタカ. Nature Study, (42): 25-26.
- 財団法人日本鳥類保護連盟. 1998. 「鳥630図鑑新装版」, 60.
- 日本鳥学会. 2000. 「日本鳥類目録改訂第6版」, 62.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 2000. 「鳥類 (カラス類を主とした) と人との関わりにみられる都市環境の変化」調査研究報告書 (平成7年度～11年度).
- 日本野鳥の会東京支部. 1999～2000. 定例・順定例探鳥会. ユリカモメ, (524)～(535).